

# まえがき

敦賀 陽一郎

(東京外国語大学外国語学部教授)

本報告集『コーパス言語学における語彙と文法』は東京外国語大学大学院 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の言語学班によるもので『言語情報学研究報告』の 7 冊目を構成する。13 言語、28 研究者のコーパス言語学研究をまとめたものである。内容は動詞構文、アスペクト、時制、態、不定詞、使役、人称・非人称、副詞、否定、主題化、語順、名詞格、比較級、と多岐にわたるが、動詞関連のものが目立っている。また、多くの分析において有標・無標の問題が考察されている点は注目に値する。以下に簡単に概観する。

まず、マレーシア語の二論文のうち、正保勇は副詞の有標の位置の可能性、不可能性を多くの実例分析を通して解明している。鶴沢洋志は動詞連続の意味的可能性を探りモデル化している。

次にパラウ語の下地理則は条件文といわれるものが名詞節であり主題化構文の特殊例であることを示している。

中国語は三つの研究があるが、望月圭子は動詞の使役と起動の交替の生起・阻害の要因を分析する。三宅登之は「動詞-着」の表す静止状態の持続と動きのある動作の持続のうち、後者の出現の制約を考察している。須藤秀樹は進行を表す「着」と「在」がそれぞれ事象を前景化、後景化することを踏まえ「NP+在+場所名詞+V 着」での動詞類型と場所名詞との関係を分析する。

中国語・日本語対照の杜偉峰は日本語の「反復相」の形式に対して中国語の無標形式という事実を踏まえ反復性について両言語のテンス・アスペクト対立を分析する。

ロシア語は六種の研究が提示されている。秋山真一は名詞複数主格・対格のヴァリエントとして語尾 /-i/ と /-a/ の両方を持つ語の使用傾向を明らかにしている。阿出川修嘉はロシア語のモダリティと体の相関関係の体系的記述を目指すべく、否定辞 не と叙想詞 мочь の結合と共起する動詞不定形の意味と体を考察している。恩田義徳は比較級の種々の形態(合成：長語尾、単語尾；単一：-ее, -ей)のヴァリエントの傾向を検討している。南條幸弘は「ИГРАТЬ+前置詞+B+<活動体名詞>」の結合において、複数主格と等しい対格形、複数生格と等しい対格形、それぞれで現れる名詞、その頻度、差異を探っている。佐藤修は完了体過去形の個別的意味の結果性(ある動作が他の動作や状態と何らかのつながりを持つこと)を分析している。小川暁道はロシア語の反復時間表現の形式と意味の対応を特に増幅反復に注目して明らかにしようとしている。

ポルトガル語の水沼修は中世ポルトガル語の複合時制 (haver, ter を助動詞とする) の実際上の分布を調査している。

イタリア語・ルーマニア語対照の鈴木信吾は、ルーマニア語が VSO 型言語であるとの仮定の上で、ルーマニア語とイタリア語の無標語順を語用論的観点から検証している。

イタリア語の田中慎吾はサレント方言での不定詞使用 (volere の後, 等) の全体像を把握すべく実例を観察, 整理している。

スペイン語の二論文のうち, 高崎敏博はある行為の結果の状態を表す「<estar+過去分詞>叙述文」の形成要件を明らかにしている。木越勉は名詞・名詞句の周りでの形容詞の前置・後置の共起における修飾機能による棲み分けを論証している。

フランス語は三論文あり, 敦賀陽一郎は動詞 *rester* の構文全体を見て, 人称, 非人称, 無人称 (主辞なし) の対応関係を調べている。川口裕司は古フランス語から現代フランス語までの活用動詞の否定形の通時的変遷 (ne-動詞-(pas など)→ne-動詞-pas→(ne)-動詞-pas) を考察している。武次三愛は古フランス語の否定の *ne* の単独使用と *pas, mie, point* と組み合わせる使用とを動詞時制, 文脈との関係から分析している。

ドイツ語の三論文のうち, 成田節は接頭辞 *be-* を持つ動詞の特徴を対格化, 焦点化をキーワードにして考察している。時田伊津子は他動詞文の無生物 3 格について, 状態変化, 授与, 付加, 影響という文意味タイプ, 名詞の定・不定, 3, 4 格の相互語順との関連で, 傾向を分析している。カン・ミンギョンは状態変化を表す使役交替動詞 (*brechen* 「折る, 折れる」, 等) の交替成立, 制約の条件を分析している。

英語・日本語対照の二論文のうち, 宗宮喜代子は「有標」と「態」の概念を整理した上で英語の態の単純さと日本語の態の多面性を観察している。Patrick P. W. LAM は英語の「-ise/-ify/-en」動詞と日本語の「～化」動詞を比較し, 事象変化対象のコントロールの可能性と事象の自発性の確認を観察している。

英語の二論文のうち, 浦田和幸は Tyndale (?1494-1536) 訳の聖書を資料として初期近代英語の最初期である 16 世紀前半の接続法を詳細に調査している。石井康毅は不変化詞 (前置詞, など) について, 先ず, 狭義の物理空間の字義表現とそこから出てくるプロトタイプのイメージ・スキーマ, 次に語彙化されたメタファー, そして狭義のメタファーの 3 段階を認め, 第 2 段階が具体と抽象の仲介として重要である点を主張している。

以上, 全て言語事実に密着しての記述・分析であり, 今後のより体系的な発展が期待できる内容豊かな研究が多い。二言語対照も幾つかあり, 有標・無標の分析も多くの言語に見られるが, より狭く限定された共通テーマがさらに多くの言語間で設定出来れば大変興味深いであろう。更に言えば, 理論的に同質な枠組みを強調した共通テーマの追求, そして, 各人の方法論をより前面に出して対峙させるような共通テーマの設定, 等, は一度努力してみる価値があるように思われる。

なお, 本報告集の査読は正保勇, 望月圭子, 三宅登之, 中澤英彦, 山本真司, 高垣敏博, 川口裕司, 在間進, 成田節, 宗宮喜代子, 浦田和幸, 黒澤直俊, 敦賀陽一郎があたり, 編集は浦田, 高垣, 敦賀が担当した。

05 年 7 月 25 日, 府中にて